

全国高校総体、いわゆるインターハイが中止となった。さらには、全国高校野球選手権大会、いわゆる夏の甲子園も中止となった。スポーツを愛する高校3年生には、かける言葉もない。スポーツとともに生き、真剣に、本気で取り組んできた選手ほど、そのショックの大きさは計り知れない。

ずいぶんと昔のことになってしまうが、自分の高校生活で考えてみた。高校3年生になり、まもなく地区高校総体だという時期に、いきなり「中止となりました」と言われたら、あの頃の自分は果たしてどうしていただろうか。

進学校のレベルの高さについていけず、高校生活に目標が見出せずにいた自分を救ってくれたのが、中学校から続けてきた部活動だった。相変わらず勉強はしないが、高校2年生の夏、秋そして冬を越えて3年生の春と、どんどん部活動への思いは強くなっていった。本気度が増していった。かなり真剣になっていた。本気でインターハイを目指していた。

ところが、地区大会を前にして、右肩を痛めてしまった。右腕が上がらない。治らないまま大会を迎えてしまった。それでも、ごまかしごまかし何とか勝ち上がっていった。県大会になり、だいぶ右肩は快復していたが、まだ万全ではなかった。そもそも十分な練習ができていなかった。東北大会になり、ようやく右肩の調子も戻ってきた。今思うと、大会直前に右肩を痛めることも実力のうちなのだと思う。

もし、大会がなくなりましたとなったら、それはそれはかなりショックを受けていたことと思う。きっと数日間落ち込んだ後に、仕方なく大学受験へと切り替えていたことだろう。そして、受験勉強をしながらも、「大会があったらなあ」といつまでも引きずっていたに違いない。たぶん、高校を卒業してからも引きずっていたのではなかろうか。

今でも、県高校総体の負けた試合や東北高校総体の負けた試合のことはよく覚えている。自分の人生が、負けた試合によって形作られたといっても過言ではない。部活動における高校3年生の最後の3ヶ月が、自分の人生に占めるウエイトは小さくはない。毎日の練習もあるが、各大会での数々の試合での経験が大きいのである。この期間が自分の人生からスッポリと抜けてしまったらと思うと恐ろしい。そのくらい価値のある貴いものである。

大会があったからこそ、試合ができたからこそ、「もういいかな」と自分の中で区切りをつけることができた。ケジメをつけることができた。とはいいいながら、結局は大学に進んでも、先輩に誘われるままに続けてしまったのではあるが。高校3年生の時点では、区切りがついていたのは確かである。

あの頃は、インターハイに出たいという結果が大切だったように思う。しかし、今、冷静に振り返ってみると、本当に大切なことは、結果ではなく「どれだけ真剣にできたか」ということのように思う。突然、目の前から目標がなくなったとき、何を思うだろうか。真剣であればあったほど、絶望や虚無感を覚えるだろう。でも、それは、本当に真剣だったからではないか。絶望を目の前にした今は、一番大切なことを知る時間でもある。

インターハイや甲子園が中止でも、それだけで人生は終わらない。今できることを真剣にやっていたら、その誠実さを見て、その過程を見て、導いてくれる大人は必ずいる。少なくとも私は、そういう方々に何度も救われ、これまでやってこられた。だからこそ、今は真剣さを失わないことである。そして、あきらめないことである。